

社会－6（第4学年） 互いの考えを伝え合い、自分の考えを発展させる事例

【学習活動の概要】

1 単元名 伝統的な工業のさかんな町

2 単元の目標

焼き物の盛んな益子町に住む人々の生活の様子について関心をもって調べ、地域の発展を願って伝統的な工業を守り受けついでたり、それを町づくりに生かそうとしたりして努力している人々の姿に触れることで、自分たちの住む栃木県の特徴やよさを考えるようにする。

3 評価規準

【社会的事象への関心・意欲・態度】

伝統的な工業の盛んな益子町に住む人々の生活の様子に関心をもち、それを意欲的に調べ、栃木県の特徴やよさを考えようとしている。

【社会的な思考・判断・表現】

伝統的な焼き物工業と自然条件、伝統的な工業を営む益子町の人々の願いや課題と地域の発展をそれぞれ関連付けて考え、栃木県の特徴を考え適切に表現している。

【観察・資料活用 of 技能】

伝統的な工業の盛んな益子町の様子について、地図やグラフなどの各種資料やインターネットを活用して必要な情報を集めて読み取ったり、パンフレットにまとめたりしている。

【社会的事象についての知識・理解】

益子町の伝統的な焼き物工業の様子やそこに住む人々の生活の様子を理解している。

4 教材

本単元で取り上げた益子町の周辺は、焼き物の原料となる良質な粘土が採掘される土地で、燃料も近隣の雑木林から容易に入手できる。また、丘陵地の連続する緩やかな斜面が登り窯を設置するのに適した地形でもある。これらの条件が整っていたことから、益子町は、日常に使う食器などの生産が盛んな町として発展してきた。しかし、近年は大量生産の工業製品に押され気味で、益子焼の生産額は年々減少し、多くの窯元では、高齢化や後継者不足などの問題も抱えている。益子町では、このような現状を打破しようと様々な取り組みが行われている。自分たちの生活の向上と郷土の発展を願いながら伝統的な工業を守り受けついでたり、それを町づくりに生かそうとしたりして努力している益子町の人々の取り組みは、同じような問題を抱える県内他地域にとって、一つのモデルプランとなる可能性がある。

本校の児童にとっては、自分たちの住む宇都宮市にも大谷石で知られる大谷地区があることから、益子町と大谷地区を比較しながら学習できるように教材開発に取り組んだ。自分の足元からも伝統的な工業を見つめることで、益子町の人々の思いや願いについての理解が深まると考えた。さらに、益子町の事例で学んだことを大谷地区にも転移・応用するような学習活動を取り入れることで、栃木県のよさを再認識し、誇りと愛情の気持ちが芽生えるようにしたいと考えた。

5 主な学習活動

(1) 単元の指導計画 (全10時間)

学習活動	言語活動に関する指導上の留意点
○学習問題を作り学習の計画を立てる。[1] 「益子町の人々はどんな暮らしをしているのだろう」 ○益子町で益子焼が盛んになった理由や益子町の現状、若手陶芸家の育成や益子焼を生かした町づくりの工夫など様々な取り組みについて調べ、栃木県の宣伝パンフレットに載せる益子町のよさを考える。[5] ○益子町と宇都宮市大谷地区を比較しながら、伝統的な工業の盛んな町の特徴やよさをとらえる。[4] ・大谷地区のよさについて年表などで調べる。(1/4) ・大谷石細工の職人に直接話を聞いて調べる。(2/4) ・大谷地区の特徴やよさをとらえ、宣伝パンフレットに載せるキャッチフレーズを考える。 <b>本時 3/4</b> ・宣伝パンフレットを作る。(4/4)	・遠足で絵付け体験や見学をした経験を基に話し合わせる。 ・写真資料や地図、統計資料等を活用させることで、友達との情報交換が視覚的にも分かりやすくできるようにする。 ・益子町の事例で学んだことを話し合いに生かすように助言する。 ・宣伝パンフレットのキャッチフレーズの妥当性を吟味する活動では付箋紙を活用することで、意見交換や言葉の取捨選択、修正などが容易にできるようにする。

(2) 本時の学習 (9/10)

①目標 大谷地区について調べた事実を基に、伝統的な産業や景観を生かして町づくりをしている大谷地区の特徴をとらえ、宣伝パンフレットに載せるキャッチフレーズを考えるようにする。

②展開

○調べた事実をクラス全体で発表し合い、大谷地区の特徴を確認する。

○宣伝パンフレットでアピールしたいと思う大谷地区の写真を選び、大谷地区のよさが伝わるようなキャッチフレーズを考えてワークシートに記入する。

- 着目した大谷地区のよさごとにグループとなり、個人で考えたキャッチフレーズと写真が合っているかどうか、そのキャッチフレーズは大谷地区のよさを伝えるものになっているかどうかなどを付箋紙を活用しながら友達同士で吟味し、必要に応じて修正する。
- 各グループでよいと思ったキャッチフレーズを発表し、クラス全体でその妥当性を吟味する。

## 【解説】

### 【指導事例と学習指導要領との関連】

小学校学習指導要領・社会の第3学年及び第4学年の内容(6)では、「県(都、道、府)の様子について、次のことを資料を活用したり白地図にまとめたりして調べ、県(都、道、府)の特色を考えるようにする」、「ウ 県(都、道、府)内の特色ある地域の人々の生活」と示されている。また、指導計画作成上の配慮事項として「観察や調査などの体験的な活動やそれに基づく表現活動の一層の充実を図ること」が示されている。『小学校学習指導要領解説 社会編』においては、学年の目標に関する記述として「調べたことや地域社会の社会的事象の特色や相互の関連などについて考えたことを相手にも分かるように表現することができるようにする」ことが示されている。

本事例では、伝統的な工業の盛んな町として益子町を取り上げて学ぶだけでなく、発展として、自分たちの住む宇都宮市大谷地区と比較できるように地域素材を教材化して学習を展開することとした。このことによって、問題解決に取り組む際に児童の興味・関心がより一層高まるのではないかと考えた。また、本校の児童は、学校行事の遠足や冒険活動などで益子町や大谷地区を訪れ、絵付け体験や見学活動も行ってきた。このように実体験に基づきながら、調べたり考えたりしてきたことを表現する言語活動を取り入れることが大切であると考えた。

### 【言語活動の充実の工夫】 一県の宣伝パンフレットのキャッチフレーズを話し合う

本校では、栃木県の広報課と協力し、「栃木県は残念ながら知名度が低い県なので、君たちには、学習したことを生かして栃木県のよさを県内外に宣伝してほしい。」という旨のビデオメッセージを作成した。県の学習全体への動機付けとしてこのビデオを見せることで、単元を通して問題を追究しようとする意欲を持続させようと考えた。

栃木県のよさを効果的に宣伝するには、言語を駆使した表現活動とその内容が重要である。今回は、宣伝パンフレットという表現方法を用いて、自分の調べたことや考えたことを必要に応じて加除修正しながら完成させる表現活動を取り入れた。しかし、インプットした情報を取捨選択してただアウトプットするような表現活動では、場合によっては独りよがりなものとなる可能性がある。

そこで、個人の考えの妥当性やよさについて、グループやクラス全体などの集団で話し合いながら吟味・検討するという学習活動を取り入れた。言語活動の充実という意味では、次の二つの点で工夫した。

- 付箋紙を付けながら話し合わせた。
- 写真と組み合わせて考えさせた。

付箋紙には、友達の考えたキャッチフレーズについての自分の意見を記入した。付箋紙は二色用意し、一方の色に改善点、もう一方の色には友達の考えのよかったところを書くように指導した。ただし、改善点ばかりを指摘し合う関係は望ましくないと考え、必ず付箋紙は二色セットで活用させるようにした。

また、キャッチフレーズとして表した考えが妥当かどうかを判断する根拠として、事実を表す写真を活用させた。イメージや言葉だけに頼ってキャッチフレーズを考えさせると、「何となくこんな言葉がいい」といった感覚的な意見交換や、言葉の響きやインパクトなどに傾斜した議論になってしまうことが懸念される。このため、集団で吟味するという言語活動が言葉遊びの活動に陥らず、事実に基づいて正しい思考や判断ができるようにしたいと考えて写真を活用することにした。

これらの工夫によって、言語活動を通して自分では気付かなかった着眼点を知り、よりよいキャッチフレーズを考えることができた児童が多く見られた。今後も集団で学ぶよさを生かしながら、一人一人の思考力を育てる指導法を工夫したい。

